

語形成のそもそもを考える

萩澤大輝

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp

キーワード：語形成 形態論 語の存在論 同一性 ミーム 素朴理論

要旨

哲学における存在論研究では「語とは何か」という問いが議論されている。認知言語学的な観点からすると、その議論に見られる混乱はプロトタイプカテゴリー観を取ることで適切に整理することができる。そのうえで、哲学と言語学の知見を接続するには、語の典型をミームという存在者だと見なす説が有望である。ではミームはいかに発見されるだろうか。まず、人間は万物流転の世界を体制化している。語をはじめとする言語的ミームが立ち現れる過程は、その体制化の一環であるリンク発見ゲームとして定式化できる。そこでは同一性や実在論にまつわる素朴理論が採用されている。これを踏まえると、派生は客観的な変化ではなく「見え」としての変化である。

1. はじめに

形態論・語形成研究において、語や派生といった概念は半ば前提となっており、それ自体に反省が加えられることは少ない¹。詳細については見解が分かれるにせよ、語は何らかの意味での対象であり、派生は語の変化であるという理解が一般的と思われる。句と語の違い、屈折と派生の違いなどに着目した議論は盛んに行われているが (e.g. 宮岡 2002、Dressler et al. 2005)、そもそも語とはどのような存在者か、派生が変化だとはどういう意味でか、というような問いが立てられることは言語学においてまったく一般的でない。

一方、哲学の存在論研究においては「語とは何か」をめぐる Kaplan (1990) に端を発する一連の議論がある。これは言語学的にも注目に値するものであるが、言語学の知見が十分でないために混乱が生じている面もあるように思われる。

本稿は、両分野の不備を補完し、より妥当な語形成の枠組みを構築することが目的である。構成は以下の通り。まずは語の存在論をめぐる哲学説を概観する (2 節)。続いて認知言語学の立場から検討を加え、典型的な語をミームと見なす考え方を提案する (3 節)。次にミーム発見の仕組みの予備的考察として万物流転の世界観を検討する (4 節)。そして言語学に立ち返り、素朴理論を用いた言語をめぐる体制化を考える。特に注目するのは同一性と (5 節)、素朴実在論である (6 節)。そこで派生は「見え」としての変化であると主張する。その後、本稿の枠組みに基づいた事例研究を行い (7 節)、最後に本稿の課題と展望を述べる (8 節)。

¹ 本稿は、京都言語学コロキウム (京都大学、2020 年 1 月 25 日) で行った同題の口頭発表の内容を発展させたものである。コメントをくださった方々に深く感謝します。

2. 語の存在論をめぐる哲学説

存在論の研究では、ハラスメント、場の空気、サービス、ムーミン谷など、幅広い対象の存在論的ステータスが問われる。(e.g. 倉田 2019)。そのなかで「語」も考察対象のひとつとして取り上げられており、(i) 語とは何か、(ii) 何が語の同一性を決めるか、(iii) 語は変化するか、などが議論されている²。

Kaplan (1990) によると、語の存在を扱う説としてはタイプ・トークン説と類似説が標準的である。タイプ・トークン説によると、語は永久不変の抽象者たるタイプであり、そのトークンとして語の事例が存在する。タイプとトークンをつなぐのが類似説である。これによると、タイプと類似した、つまり綴り・音形などの内在的性質を共有した物理的存在が当該語のトークンとなる。直感的には正しそうだが、これにはカプラン自身をはじめとして、数々の問題点が指摘されている。

語を抽象的なタイプとする説については、語の多様性が問題となる。語の綴りや音形は地域差や大母音推移など共時的・通時的に多様な変異がある (color と colour など)。タイプの不変性を維持するならこうした変異のすべてを独立した別語と見なすことになるが、それは直感的に支持しがたい。日常的な感覚では color と colour は同一の語だろう。

類似説の問題として、第一に別語の同一視が生じてしまう。同音異義語は実際には区別されるが、類似性だけではそれを捉えきれない。第二に、非類似の切り捨てが生じてしまう。タイプとの類似性が低ければ語は発されていないことになるはずである。しかし、麻酔でうまく話せない程度の状況であれば語を発していると考えるのが自然である。第三に、菊池 (2015: 209 f.) によれば「語の過剰増殖」の問題もある。類似説は、類似さえあれば何であれ語であると予測するが、世界中のあらゆる爪楊枝が英語の一人称代名詞 I のトークンだという帰結は直感に反する。

このような問題を受けて、カプランはステージ・連続体 (stage/continuant) モデルを提唱する (Kaplan 1990: 98)。これによると語とは具体的なステージ (発話、筆跡および記憶) からなり、そのステージたちは新たに生じるたびに融合・肥大していく³。こう考えることで、イデア的な存在を想定することによるタイプ説の困難は回避できる。類似説に代わる説明として、カプランは意図説を提唱する。すなわち語の同一性を保証する基準は、話者がそれまでに受け取った語のうち特定の語を復唱・模倣しようとする「意図」である (p. 104)。こう考えることで類似は基準でなくなるため、上の問題は解消される。

このカプランのモデルにも批判がある。Hawthorne and Lepore (2011) は類似説批判に同調しつつも (p. 451)、カプランの問題点を詳細に論じている。第一に、ステージの融合が語と見なされる条件や、2つのステージが同一語の連続体の部分をなすと見なされる条件が不明である。ただし、これはカプランも H&L も認めるように「人の同一性」(personal identity) に見られる困難と類比的であり、語の存在論に固有の問題ではない (pp. 450 f.)。第二に、潜在的な語の扱

² 語の存在論では固有名の議論も盛んだが (四津 2007 など)、語形成に直接的には関わらないため割愛する。

³ カプラン自身は意図していなかったものの (Kaplan 2011: 508)、これは四次元主義的な主張と受け取ることができる (Hawthorne and Lepore 2011: 450)。

いにも難点がある⁴。カプランに従うと、およそ語であれば何らかの形で具現化している必要がある。一方で、接辞 *un-* や *anti-* などのきわめて高い生産性を考えると、(トークンとしては未実現だが、具現化すれば適格と見なされるようなものが考えうるという意味で) 一度も具現化したことのない「語」が存在することは明らかである (p. 455)。第三に、意図の権威も疑問である。たしかに麻酔で多少うまく話せない程度ならまだ許容の範囲と思われる。しかし「ヘイ・ジュード」を歌う意図があったとしても唸り声しか出ないのであれば、それは「うまくない」(bad performance) というより「できていない」(non-performance) と見なされるだろう。正確にどこと指定するのは困難にせよ、語認定の許容には限度があるのである (p. 462)。

3. 言語学からの検討

本節では、語の存在論をめぐる議論はプロトタイプカテゴリー観を取ることで適切に整理されることを示す。また、哲学と言語学の知見を接続するには語の典型を「ミーム」という存在として捉える見方が有望であると主張する。

前節で触れた類似説・意図説は語の認定に、タイプ・トークン説やステージ・連続体モデルは語の存在論的ステータスに関わるものである。これらをめぐる議論の紛糾について H&L は「本とは何か」と同様に「語とは何か」にも文脈独立的な答えはないと述べている (Hawthorne and Lepore 2011: 484)。これはすなわち語というカテゴリーが多面的だということであり、複数の基準が考えうるのはそのためである。この多面性を適切に説明するためには、古典的カテゴリー観から脱却する必要がある。以下に示すように、プロトタイプ的な観点を取ることで実態に即した説明ができるのである。

まず、語の認定に関しては少なくとも3つの抽象的な基準・条件がありうる。第一はすでに見た類似説である。これはある面で直感をよく捉えており、補完こそ必要であれ棄却は困難である。そもそもプロトタイプ理論からすると唯一の基準に絞る必要もない。第二は Scott-Phillips (2014) の意図明示・推論 (ostensive-inferential) モデルである。これは語の認定に特化したモデルではないが意図説の修正版として位置づけられ、聞き手側の推論も加味するなど、より認知的に妥当なモデルである。これにより、語の認定に多少の融通が利くことを捉えつつも、話し手や聞き手が恣意的に語を認定する事態は排除される。また、類似説だけでは過剰増殖の問題を招くこととなったが、このモデルに基づけば、爪楊枝が代名詞 I のトークンとなるのは伝達意図を持って他者に提示する場合に限る、と適切に絞り込むことができる。第三は使用説である。ここでは「ある対象について、それが支障なく使用されている限りでその内実を問わない」ほどの考え方を指す。たとえば乳児やペットの発声は、養育者などがそれと認め、そのことに実践的な支障がない限りで言語的発話と見なせる。発声主体の意図が不在ないし不明であるため、受け取る側の判断の一致をもって語が認定されるのである (おやつを食べた際の発声を「美味しい」と理解するなど)。以上のいずれも絶対的な基準ではなく全体として典型性の条件と考えるならば、どれかが欠けても単に周辺の語として認めることができる。

⁴ 「潜在的な語」(potential word)、「可能な語」(possible word) については Bauer (2014) を参照。

言語学的には、語としての資格はより具体的に (i) 表記、(ii) 音韻、(iii) 意味、(iv) 統語などの観点から総合的に判断される。ごく大雑把には「一定の意味と形式を備えた、句の構成要素となる記号」のように規定できるが、この規定から乖離する例も多々あり、ここにもプロトタイプ構造が見られる。意味を欠くものは無意味語や幽霊語などと呼ばれるが、ある種の語であるとは見なされている。形式を一切欠いてしまうと語たりえないと思われるものの、口語ゆえに綴りの慣習がない語、表記はあるが発音が不明ないし揺れる語などは珍しくない⁵。

「語とは何か」という問いは「語がどのような類に包含されるとすれば理解が進むか」と言い換えることができる (Bromberger 2011: 486)。類 (genus) と種差 (differentia) という観点からすると、上の言語学的な語の規定は、音素より大きく、句より小さいサイズの存在を取り出そうとしたもので、基本的に種差に注目している。ところが類については積極的な議論がなく、単に記号だとする程度にとどまる。では記号とは結局のところどういう存在者だろうか。この問いには「慣習」の一種であると答えることができる。これにより語に対して類と種差が暫定的に与えられたことになる。しかし、慣習であるかどうかには程度性があるため、その点で通常の物理的存在者などとは異なる。語の典型は慣習的であるが、慣習的でないとしても必ずしも語でなくなるわけではない。プロトタイプの考え方に立つことで、「非慣習的な語」を矛盾ではなく周辺事例として取り込むことができるのである。

語を慣習の一種と見なす考え方と親和性の高い哲学説として有望と思われるのが、Dennett (2017) で展開されている語のミーム説である⁶。ミーム (meme) とは文化の伝播単位を遺伝子やウイルスと類比的に捉えた概念で、「文化的な自己複製子」などと定義される存在者である。たとえばメロディー、禁欲主義、野球帽を後ろ向きにかぶることなどが例となる。本稿ではこれを「模倣によって伝達される慣習的な振る舞いのパターン」と広く捉えた上で、語の典型はミームであるという立場を採用する。なお、ミーム論の妥当性をめぐっては懐疑的な議論もあるが (cf. Aunger 2000, Origgi and Sperber 2000)、本稿はミームについて、言語についての理解を促す限りで有益な人工的カテゴリーだとする非実在論を取る。ミーム論は文化・慣習を捉える一種の概念メタファーであり、一般に、メタファーには効用もあれば限界もあるのである (Langacker 2016b)。

語のミーム説には以下の利点がある。第一に、イデア的な議論を自然化できるため、タイプ説が抱える困難が回避される。第二に、語に内実を持った上位概念が与えられることで言語学以外の分野の現象との対照研究の可能性が開ける。語は広まったり廃れたりするが、これは淘汰圧を受けつつ変化・伝播するというミーム一般の性質である。第三に、ミーム未満の語に依拠した論を棄却できる。大規模コーパスでは語形成規則の「反例」が多く見つかるが (Bauer 2014)、その多くはまだミームとしての普及に成功していない臨時語である。語形成規則が慣習的な語の規則性を捉えたものとすれば、例外的な臨時語があったとしても反例にならない。

⁵ 慣習的な綴りのない語は usual や casual の略形 yooj / uzh, cash / casj など (McCulloch 2019: 9)。発音が不明・揺れる例は「月極」、「小人」、ASUS、gif など、視覚語 (eye-word) と呼ばれる (cf. Jespersen 1906: 144, § 142)。なお Hawthorne and Lepore (2011: 450) にも (具体例や用語による整理はないが) 同趣旨の指摘がある。

⁶ 語のミーム説については Worden (2000) や Dout (2013: 47 ff.) も参照されたい。

第四に、上の広いミーム理解に基づく限りにおいて、語が人間の「振る舞い」の一種であるという点が強調される。後述するように、語をモノとして捉える素朴实在論は根強いが、これに揺り戻しをかけることができるのである。H&L も語が踊りやゲームと多くの点で類比的だと指摘している (Hawthorne and Lepore 2011: 480)。

さらにミーム説の帰結として、「説明」の限界が明確になるという点もある。このことは積極的に評価しうるものである。たとえば、語形成規則には例外が多いことが知られている。規則から逸脱していても、何かのきっかけでミームが生じ、特異であるがゆえにニッチを獲得することはありうる。特に語は統語規則よりも具体性が高いため、個別に記憶されることで難なく言語知識に取り込まれてしまうのである。

他の現象とのアナロジーで考えよう。食材の合理的な組み合わせがすべて料理ミームとして慣習化しているわけではないし、逆に、非常にコストがかかるなど、非合理的な組み合わせも慣習化している。これは語でも同様である。語が文化・慣習の一種だとすれば、例外の存在もさほど不思議ではなく、それをありのまま受け入れることへの抵抗は薄まると思われる。

さらに論を進めると、慣習として存在している語・していない語ともに正負両方の動機づけが考えられる(最適性理論を思い起こされたい)。正の動機づけがあるのに慣習として存在しない語は偶然の空白 (accidental gap) などと呼ばれる。要するに語彙体系は別様でもありえたのであり、数ある体系の中で現に〈これ〉が現実化している理由は説明しえない。属性(による動機づけ)から存在は導けないのである。

たとえば現代英語の *hear*・*ear* や *here*・*there*・*where* はそれぞれ意味も形式も類似している点で、この体系には正の動機づけがある⁷。しかし「聞く」を *here*、「あそこ」を *there* と表すとしても同様の動機づけがある。これはさほど突飛な想定ではなく、現に *Oxford English Dictionary* には「聞く」系の語を *ere*、「場所」系の語を *ear* とする異綴も記録されている。つまり、言語体系が一定の秩序に収斂するとしても、同程度の秩序は複数ありうるのである。このように、現実の言語体系ないしミーム複合体 (memplex) が生じた理由を問い続けていくと、究極的には「ただ世界がそうある (あった)」としか言えなくなる次元がある⁸。

(i) 語とは何か、(ii) 何が語の同一性を決めるか、(iii) 語は変化するか、の暫定的回答をまとめておく。語はプロトタイプカテゴリーを成し、その典型は慣習的な振る舞いのパターンとしてのミームである。語の認定は、類似性、意図明示・推論、使用などが関わって判断される。語は永久不変のタイプではなくミームであるため変化しうる (この点は6節で再考する)。

⁷ Taylor (2002: 272 f.) は認可するスキーマがないという理由から *hear* を *h* と *ear* に分析する立場を退けるが、こうした局所的な動機づけが成立している話者もいると思われる。児童用の辞典 *Merriam-Webster's Elementary Dictionary* の *hear* の項には、擬人化された *h* の字が右隣の耳の絵に向かって話しかける絵 (*h-ear* の図案化) とともに以下の解説がある。

(i) *headscratcher* You need ears to hear and you need "ear" to spell "hear."

⁸ そもそも何であれ理由を問い続ければ存在驚愕 (*θαυμάζειν*) に帰着する。たとえば Diamond (1997) は家畜、文字、政治機構などを持つ文化と持たない文化があることを地理的な要因から統一的に説明している。しかしユーラシア大陸が東西に長いという地理的事実は必然ではなく、説明の遡及はそこで終わらない。平沢 (2019) に見られる「この事実は覚えるしかない」のような態度は例外として、一般に言語学では説明への関心が強い。もちろん、説明として動機づけに訴えることは恣意性に囚われた言語観から脱却する上で有効である。だが、その動機づけ自体が相対化されうること、したがって究極的な説明にならないことは自覚すべきだろう。

4. 万物流転と体制化

語がミームであるとして、人間がそのミームと適切に共存するためには、ミームと非ミームを区別したり、ミーム間の異同を判断したりする必要がある。こうした判断はいかになされているのだろうか。本節はその予備的考察として、言語を包摂する「世界」について考える。

まず、ヘラクレイトスに帰せられる万物流転 (πάντα ῥεῖ) という世界観を検討しよう (cf. 廣川 1997、古東 2005)。本稿は万物流転を「世界は刻々と変化しており、認識に先だって確たる存在を有する対象はない」と理解したうえで、これを妥当な主張と見なす。万物流転を支持する根拠として (i) 素粒子レベルで観察すれば、安定的に思える対象も流動的である、(ii) 長期のスパンで観察すれば、不動に思える対象も流動的である、などが指摘できる。後者は大陸の移動などを思い起こされたい。

しかし現象学的な実感としては、この世界は安定した像を結んでいる。これは環境を探索する我々が流転する世界に対してカテゴリー化ないし体制化 (organization) を施した所産である。これには適応的意義があるだろう。たとえばヒトは赤外線や超音波を感知しない。知覚には分解能があり、世界の流動を一定の粒度に抑えて認識する (cf. Langacker 2006: 114 ff.)。対象の見えが変化しても、それを同定・トラッキングして把握し続ける。これらはみな安定的な世界の立ち現れに貢献している。少し見えが変わるたびに別の対象と見なしては、生活に支障をきたすだろう。統合失調症や他者の同一性認識に困難を伴うカブグラ症候群などはこの体制化の異常と考えられる (Dennett 1996: 111)。

こうした体制化がより顕著となる例として、パターン化特性 (patternicity) というものがある (Shermer 2011)。これは秩序や意味が存在しない (と科学的には考えられる) ところにそれを感じる傾向である。たとえば、木目が顔に見える、独立事象に因果を感じるなどの現象がパターン化特性の事例に当たる。また、変化盲 (change blindness) も特筆に値する。これは知覚対象の一部が徐々に変化しても気づかないような現象をいう。体制化は日常的かつ円滑に行われているがゆえに気づきにくい、こうした事例において部分的に顕在化するのだと考えられる。

一方、世界の側の因果的な秩序も存在する⁹。これは万物流転に対して「自然は飛躍せず」と要約できる。そもそも万物流転とは、対象が目まぐるしくランダムに変化するようなサイケデリックな世界観ではない。木製の椅子が徐々に朽ちていくことはあっても、椅子が一瞬でワインレッドの瀬戸内海に変わるような事態は、夢などを除き、おそらく生じない。万物流転とはあくまでも因果律が成立すると捉えられる程度には秩序を持った流動であって、無軌道な千変万化ではないのである。まとめると以下ようになる¹⁰。

⁹ 正確には、世界は「なぜか」「現時点までのところ」安定的である「と感じられる」となる。これは帰納法で正当化できない。自然の斉一性原理 (未来は過去に似る) に訴えても、それ自体が今後変化するからである。

¹⁰ なお、この議論はさらに次のように整理できる。まず科学などを考慮してヒトの視座を相対化することで得られる像が万物流転である。それを対象として個々の概念化者が行うのが体制化であり、その諸体制化を相対化して得られる像が世界の側の秩序である。この点は田中太一氏との個人談話に示唆を受けた。

- (1) 分析者の観点からすると世界は万物流転と捉えられる。一方で、素朴な実感として世界は安定的である。これは概念化者による体制化と世界の因果的秩序に依存している。

なお、ここでいう分析者（観察者）と概念化者（言語使用者）の関係は排他的ではなく、前者が後者に包摂されると理解されたい。当然ながら、分析者も日常的に言語を使用しているからである（6節で見るように、分析者が素朴実在論に囚われることもある）。

ところで言語は世界の中で生じる現象である。したがって本節の議論が妥当であれば、それは言語についても適用される。つまり、個々の言語使用を厳密に観察すれば一つとして同じものはないが（Hockett 1987）、その異なり方は一定の範囲に収まる。概念化者は不断に体制化を行っており、世界の側でも言語の慣習（を内在化した話者の知識）がランダムに更新されるなどせず一定の秩序があるわけである。

5. 言語における同一性

5.1. 体制化

前節を踏まえ、言語の発生を個体発生レベルで一人称的に考えると、まずいきなり世界があり、それに体制化という働きかけをすることで、言語的ミームを含むモノやコトが立ち現れることになる。言語は主体による体制化の所産なのである。その体制化の詳細には個人差もあるが（Dąbrowska 2020）、実際の言語使用では概して表面化しない（萩澤 2018）。

そのような言語をめぐる体制化は「素朴理論を用いて各種リンクを発見するゲーム」と定式化できる¹¹。リンクとは言語使用者が感じる類似性や関連性などの関係（cf. Goldberg 1995）、ゲームとは言語使用者の生活に即した実践をいう（cf. Wittgenstein 1953/2009）。なお、一般語の「発見」は対象がもともと存在している含意があるが、本稿ではその含意を除き、創造的なプロセスを指すものとして使用する。

ややもすると所与の事実に見える事柄も、仔細に観察すると素朴理論を用いた体制化の所産であることが顕在化する。たとえば認識の粒度に関して、次のような素朴理論が考えられる。

- (2) 一定の類似性・関連性があれば同一の語である。

ある場面で受ける刺激（たとえば太郎が発する「イヌ」）と別の場面で受ける微妙に異なった刺激（次郎が発する「イヌ」）をあるレベルで同一視してスキーマ抽出をしなければ、頻度1の事例が増えるばかりで言語知識は成り立たない。ごく平凡な単純語（simplex word）であっても、それが言語知識として存在することは自明ではない。諸トークンの間に同一性リンクを発見することではじめて成り立つのである¹²。

形式だけでなく、意味の面でも同様の観察ができる。たとえば over の分析などに見られる極

¹¹ Benczes (2019: 19) は “We routinely search for meaning at all levels and strive to make connections phonological and semantic structure wherever we can.” と述べ、広範な現象を紹介する。これはリンク発見ゲームに他ならない。

¹² 同一性リンクは認知文法の用語では correspondence line に相当する（cf. Langacker 2019: 355）。

度に細分化された多義や、「しみる」の換喩的多義のような意味変化（西村・野矢 2013: 149 ff.）においては体制化が見て取りやすい。前者は意味的な分解能の限界であり、後者は微細な変化をリアルタイムで自覚することが困難という点で変化盲の一種である。

また、以下のような素朴理論も考えられる。

- (3) a. 長い語は短い語で構成される。
- b. 短い語は長い語の要素となる。

このビルディングブロック的な言語観をリンク発見の観点から捉え直すと、合成語（complex word）がそれとして成立するのは、主体がその一部を別の要素と同定・対応づけするからだ、ということになる。たとえば「リンゴ狩り」はその前半部分に果物の名称を発見することによって初めて合成的な理解が可能となる¹³。こうした語の構成関係でさえ自明の「事実」ではなく、各人によって創造性に程度差のあるリンク発見ゲームの成果として得られる「知識」である。適切なリンク発見にいたらない（分析意識が働かない）まま語を記憶する、異分析が生じる、などの現象があることはその証左である。

ところで、太郎が発する「イヌ」と次郎が発する「イヌ」が同一である、果物の「リンゴ」が「隣国」の要素でない、などは共同体の大多数で合意が得られると思われるが、より個人的な揺れのある体制化も無数にある。たとえば「正確」と「精確」、「群集」と「群衆」などを同一語の異表記と見るか別語と見るかは判断が分かれるだろう。伝統的に別語であった「延々」と「永遠」が合流し、「永遠と」のように言う話者も増加している。英語でも partner と pardner（相棒）など、同一語と見るかどうか微妙な変異形はままある。こうした語は人によって様々な程度で類似性が感じられているだろう。そして、明確に感じられる同一性はこうした例で発見されるリンクの延長にあるのである。

この点について Hockett (1987) も類似の議論を展開している。なおホケットは本稿でいうリンクをレゾナンス（resonance; 連想）と呼んでいる¹⁴。

- (4) It does not matter that the line of association is personal, since all such associations are personal, and all that varies is their strength and how widely they are shared. (Hockett 1987: 76)

ホケットによると、新たに知った語や頻度の低い語はレゾナンスを喚起しやすい。たとえば noisome（不快な）・noisy 間の類似は handsome・handy 間のそれと大差ないにも関わらず、前者の方がより連想が働きやすいという（p. 92）。つまり、十分に定着していない表現ではリンク発見ゲームが積極的に行われるということである。それによって一定の合成的理解が可能となり、

¹³ 一方で、合成性を著しく欠くために「隣国」が「リンゴ」から構成されているとは感じられにくい。ただしたとえば「隣国」という発話をオンラインで処理する最中に「リンゴ」の知識が活性化する可能性はある（cf. Frost et al. 2008）。なお Teichmann (2016) は *Socrates* の中に *rat* があると言えるかを哲学的に議論している。

¹⁴ 近年の形態論研究においてレゾナンスを再評価したものとして Bauer (2019) がある。

記憶の定着が促されるものと思われる。以下はこうしたレゾナンスが感じられると思しき語のペアである。ホケットによるリストを整理したうえで抜粋した (pp. 155 f.)。

(5) adult : adultery	brim : rim	bypass : bylaw	debit : debt
devil : evil	ear : hear	frail : fragile	furbish : furnish
griddle : grill	grow : green	isle : island	karat : carat
Monday : moon	mongoose : goose	orchard : vineyard	pencil : pen
plane : plain	plus : minus	recognize : reckon	regimen : regime
shade : shadow	sonnet : sonata	sup : sip	window : wind

これらの間に「正当」な語源的・形態的な関係があるかという点は現代の話者の言語知識の内実と直接的な関係にはない¹⁵。歴史的な事実がどうあれ、各話者がこれらの間にリンクを見つけるにしたがって、知識のなかで語ミームが秩序づけられていくのである。

同様のリンク発見ゲームは規範との乖離においても顕在化する。以下はネット上で観測される「誤用」を収集した三條 (2015) からの抜粋である (左が観測例、右が規範)。合成性を高めるリンクが多いことが分かる。

(6) 朝っぱな : 朝っぱら	一色単 : 一緒くた	痛ぶる : 甚振る
エゴひいき : 依怙臆眉	物議をかます : 物議を醸す	観光鳥 : 閑古鳥
苦しまみれ : 苦し紛れ	強いたげる : 虐げる	除外視 : 度外視
先見の目 : 先見の明	責任転換 : 責任転嫁	攻めぎ合う : 鬩ぎ合う
粒さに : 具に	とっさ的に : 発作的に	間逃れない : 免れない
文字って : 振って	油断を許さない : 予断を許さない	寄りを戻す : 縊り

繰り返しになるが、「いたぶる」の中に「痛 (い)」との部分的なリンクを発見することと、「リンゴ狩り」の前半を「リンゴ」と同定することの間に本質的な差はない。

様々なリンク発見の例を見てきたが、これらはあくまでゲーム、すなわち生活の一部である。「その語とこの語は同一か」と直接的に判断するようなことはまれであり、通常の言語使用を観察することで、その一端が間接的に知られるのである¹⁶。たとえば別語として認識されている類音語は押韻に活用され、無意識に用いてしまったことに気づくと No pun intended. (洒落じゃないですが) などと釈明が入る。「パンはパンでも食べられないパンは」という謎々を知って

¹⁵ ミームは文化的に継承されるものである以上、無関係とまでは言えない。本来は危険回避という目的があったであろう「梯子の下を通ると不吉」「川で遊ぶと河童にさらわれる」など、ミームは形骸化したまま継承されるのである。同様に、現代の話者の知識に含まれない通時的事実が現在の言語表現の振る舞いを左右することもある。たとえば国広 (1997: 190 ff.) は、「あと」の原義を「足跡」と考えることで「跡」「後」の多義の全容を説明している。しかし当然ながら、この原義を知らなくても「あと」を適切に使うことは可能である。

¹⁶ 野矢 (2012: 292 ff.) を踏まえると、直接的な判断はアスペクトゲーム (語体験ゲーム)、通常の言語使用は通常ゲームである。

いれば、「フライパン」と（食べ物としての）「パン」の間に一種のリンクがある可能性が示唆される。

各種リンクを整理すると、*ear* と *hear* のように綴りや意味などを記憶する上で有益なものはニモニック (mnemonic) リンク、(規範からして) 有害なものはコンフューザブル (confusable) リンクと呼ぶことができ、そのほか押韻や洒落などに活用されるリンクもある (cf. Evans 2007、塩田 2018)。そして同一性リンクはこれらの極端な事例として位置づけられるのである。

5.2. 自己組織化

個々の話者のレベルで観察される再分析などによるミクロな体制化 (organization) に対して、共同体規模で観察されるマクロな秩序の創発は自己組織化 (self-organization) と呼べる。これは言語に限らず、自然科学や社会科学など幅広い分野で見られるものである (Keller 1994、Bybee 2015: 11 章、Dąbrowska 2020)。

たとえば *jumper* (上着) は語源的に *jump* (跳ねる) と無関係であるが、それでもこの語形に落ち着いている。*burial* や *bridal* の *-al* も同様で、語源からすると接辞の *-al* とは無縁である¹⁷。さらに、*-er* のつく語群を観察すると (i) *revolver* などの合成的な語、(ii) 語基が廃語化した語、(iii) 自己組織化で語形が *-er* になった語などが渾然一体となっている。Bauer (2019: 15) の例を引くと *barrier* (柵)、*dagger* (短剣)、*hammer* (金づち)、*tether* (つなぎ縄)、*trencher* (木皿)、*trigger* (引き金) などがある。ミームの同一性は主体の認識に依存する以上、このような合流がありえるのである。

以下のような一般化に基づく自己組織化と分析できる言語変化もある。なお「語彙の場をなす」は言語知識を表示したネットワーク上で近傍に位置する、ほどの意味で理解されたい。

- (7) a. 語彙の場をなす語は形式が似ている傾向がある。
- b. 形式が似ている語は語彙の場をなす傾向がある。

たとえば *happy* と *unhappy* などは (7a) (7b) とともに当てはまるべくして当てはまる通常の例である¹⁸。一方 (7a) に関して、*male* と *female* などは語彙の場をなすという事実がまず先にあり、後から類似性を高めるように形式が変化した例である。また (7b) では、たとえば *surround* はその一部が *round* と同定されたことに応じて意味も「横溢」から「包囲」へと変化し、*round* と形式だけでなく意味も類似するようになっている。

以上本節では、言語の随所に観察される規則性・体系性は、各種のリンクを発見することによる体制化・自己組織化によって生じるということを論じた。

¹⁷ 動詞を名詞化する接辞 *-al* の語基は最終音節に強勢があるという一般化があるが (cf. *arrival*, *renewal*, *survival*)、これらに *burial* (<*búry*) が合流することで語形成規則に例外が生じることになる。

¹⁸ 「鳥取」「島根」などは偶然これに当てはまる。また *type*・*token* や *nature*・*nurture* など対になる用語が類似する場合、その提唱者が無意識的にであれ類似性に惹かれてその語を選択した可能性がある (cf. Benczes 2019)。

6 言語における実在論

本節では言語を個体・モノとして捉える体制化を考える。これは Lakoff and Johnson (1980: 25 ff.) のいう「存在のメタファー」(ontological metaphors) と重なる。議論の展開として、まず使用者の意識の上で言語的対象がいかに存在しているかを考察し、それを素朴実在論と特徴づける。続いて分析者の観点からそれを捉え直し、「構成論」として定式化する。

議論に先だって「タイプ」を整理しておく。哲学におけるタイプは認知言語学的にはスキーマとして捉え直される(ただしスキーマは可変であるため、永久不変の抽象者というタイプ理解と完全に同一ではない)。個々の話者レベルでの語タイプはスキーマ的・可変的な知識として心的実在性がある。それらを共同体レベルで一般化した語タイプは慣習(ミーム)として存在する。これは個人の知識内にある語タイプよりもさらにスキーマ的であり、可変とはいえ、より安定的である(ゆえに規範意識が生じうる)。

ではまず椅子や阿蘇山のような物理的対象を考えよう。知覚対象の存在は知覚時点に限定されるが、概念化者はそれをいわば過去から未来への切れ目ない延長の断面として捉える。すなわち、まばたきの瞬間など知覚していなかった時点でもその存在は欠落していない。いわゆる対象の永続性(object permanence)である。さらに、その延長がどれほど遡れるかも暗黙裏に推測している(たとえば阿蘇山より歴史のある椅子は考えにくい)。このような物理的対象の存在が主体による認識や使用に依存しないとするなら、それは実在論の立場である。

これを踏まえて語という存在を考えると、それが認識・使用の場に限定される(語は産出される瞬間にのみ存在し、それ以外では端的に存在しない)という考えは日常的な実感としては不自然だと思われる(Jackendoff 2012: 22)。語は抽象的であるにせよ、静的・固定的なモノとして実在論的に捉えられているのである¹⁹。

こうした実在論的な考え方はあくまでメタファーのはずだが、語形成・形態論の研究者の間でもおそらく無自覚のうちに普及・蔓延していると思われる。たとえば語基(base)、語幹(stem)、語根(root)、切り取り(clipping)、項目・配列(Item and Arrangement)モデルなどはみなメタファーによる用語であるが、そのことはあまり明言されない。これが表現上の単なる「あや」であれば問題はないが、理解・認識にまで影響していれば事態は深刻である²⁰。

共同体レベルでの語タイプについても事情は同様である。それらの間に数的同一性は成立しないはずだが、あたかも特定のヒト個体が成長などの変化をこうむるように、数的に同一の語が変化するような語が見られる²¹。特に注目したいのは「happy が happiness に派生する」のような表現である。これは happy という要素が両語に共通して感じられるという直感に基づくものと思われる。これは語タイプ間に部分的な同一性リンクが発見されたということである。

¹⁹ 一方で、認知文法は形態素を含めた各種の言語構造を動的なプロセスとして捉える(Langacker 2019: 346)。語を「振る舞いのパターン」の一種とする本稿の立場はこれと整合的である。

²⁰ Langacker (2016b: 10) は以下のエピソードを紹介している。なお引用文中の the machine は文法のこと。

(i) In regard to “deletion rules”, I recall a linguist asking, quite seriously, where the extra pieces went after they were truncated. He was evidently worried that the discarded elements might clog the machine.

²¹ もちろん屈折と派生については「同じ語の変化か、別の新たな語彙素の生成か」が区別の基準とされるが、屈折・派生という概念と独立に語の同一性が規定できるかは疑わしい。

あえて比喩的に言うと、語タイプ間の同一性を成立させているのは、独立の対象に同一性の「糸」を通して数珠つなぎにするような概念化である。つまり、語の派生とは分析者からすると変貌ではなく入れ替わり・仮現変化（apparent change）であり、使用者の実感レベルでの変貌は体制化が構成する「見え」・使用者錯覚（user illusion）である²²。このように、語が概念化によって構成されると考える立場は实在論に対して「構成論」と言うことができる。

表 1. 立場による捉え方の整理

	使用者	分析者
言語観	素朴实在論	構成論
語の存在（個人）	抽象的実体	スキーマ的知識
語の存在（共同体）	抽象的実体	慣習（ミーム）
語の派生	客観的变化	仮現変化

語の構成論に依拠すると、語形成は抜本的な再考が迫られる。個人の知識における派生関係は歴史研究が明らかにする経緯と同一視できない²³。個体発生（話者が共時的に感じる派生関係）は系統発生（通時的な発展の経緯）を繰り返さないものである。前者は個人の知識内での基準・精緻化（Baseline/Elaboration）関係に還元される（Langacker 2016a）。つまり、語 X が語 Y に派生するとは、X が Y の参照点になり、Y について X が痕跡的認知（cf. 国広 1985）の対象になるということである。ラネカー自身による以下の図（d）は同一語が成長するかのような素朴な派生観をよく捉えるものであり、（e）では構成論的な考え方が比較的分かりやすい。

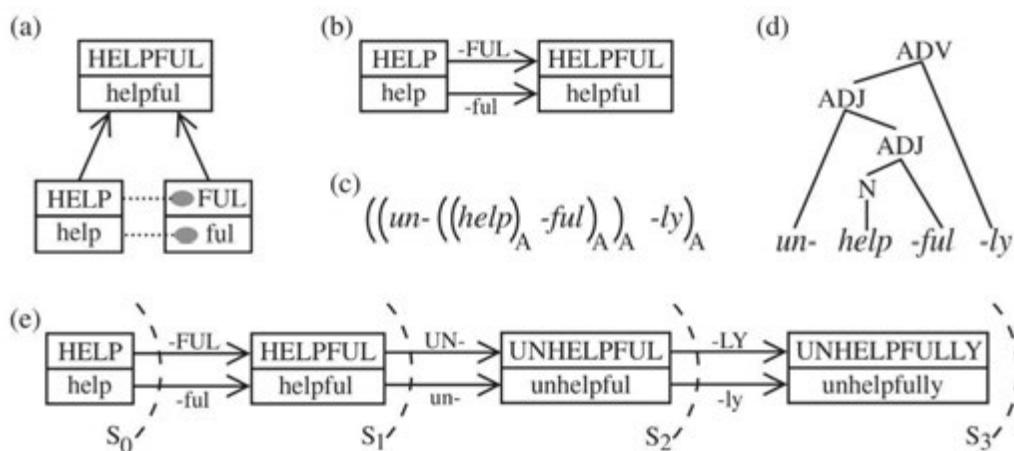


図 1. 形態論的 B/E レイヤーの諸表記（Langacker 2016a: 417）

²² 変貌・入れ替わりは西山佑司の用語。「花子の一番好きな作曲家が変わった」のような変化文で、同一個体の性質が変わる読みが変貌、ベートーヴェンからバッハなど別個体になる読みが入れ替わりである（西山 2013）。仮現変化は仮現運動（apparent motion）を筆者が一般化したもの。使用者錯覚は Dennett（1991）の用語。

²³ 注意すべきは、歴史研究による知見も、当時の言語使用者の素朴知識の再構築だという点である。

7 事例研究

本節では同一性をめぐる3つの事例を短く考察し、本稿の枠組みの独自性を示す。

7.1. 既存の語との同一化

構成論は通時的経緯と共時的知識の違いが明白な例を考えると理解しやすい。たとえば現代英語における *shamefaced* (恥ずかしそうな) は *shamefast* の音変化によって生じた語とされる。しかしミーム伝播の途中で変異が生じ、古形は失われている。したがって、現代の母語話者の知識を記述するのであれば「*shamefast* の後半が *faced* に変わった語」ではなく、単に「*shame* と *faced* の複合」と言うべきである。かりに分析者にとって *shamefast* と *shamefaced* が連続したミームであっても、使用者は両者の間のリンクに無自覚なのである²⁴。

上の例は *fast* が *faced* に引きつけられた変化である。これを一般化すると、起源はどうあれ類似があれば既存の語と同一視される傾向があるということである。車輪の再発明的に、たまたま既存語と類似した語を考えついたとしても、体制化の働きにより、既存語を参照点として解釈されやすいのである。例として *disinterested* がある。*interested* (関心を持った) の否定としてこの語を思いつく話者がいても、一般には「利害関係のない、公平な」を意味する伝統的な *disinterested* の拡張と見なされやすい。ここに規範意識が生じる一因がある。すでに慣習的な用法があるものと同一の語であれば、そこからの乖離は望ましくないと思われるのである。もし同一化されずに、いわば他人の空似のような同音異義と見なされるのであれば「無関心」義の *disinterested* 伸しようは糾弾されないはずであるが、現状はそうではない。

7.2. 過去の表現との同一視

上述したように人間は一般に対象の古さを推測していると思われるが、言語表現についてはその起源を短く見積もってしまう現象がある。これには少なくとも以下のような2通りの要因が考えられる。

- (8) a. 素朴理論によって起源を短く見積もる。
- b. 独立した表現の同一視によって起源が古く見える。

まず (8a) は「起源の古い表現は格式的、新規表現は俗語的」のような傾向から説明することができ。つまり、実は古くからあるが現代において俗語的な表現 (*literally* の強意用法など) の起源は短く見積もられやすいのである。これは Zwicky (2005) が「新規性の錯覚」(*recency illusion*) と呼ぶものと実質的に重なる。

一方で (8b) は類似表現を同一視する傾向から説明される。客観的には独立したミームであったとしても言語使用者によって同一視が生じることがあり、結果的に予想以上に起源が古く

²⁴ もちろん *shamefast* と *shamefaced* の連続もあくまで「見え」ではあるが、母語話者の知識と混同しない限りで有益な記述である。無数の *X-faced* 型の語に慣習化の可能性がありつつ多くが語彙の空白である中で、なぜ *shamefaced* が現に慣習化しているのかという問いに(究極的でないにせよ)一定の答えを与えるからである。

感じられるのである（「新規性の錯覚」に倣うと、これは「伝統性の錯覚」と呼べる）。たとえば『日本国語大辞典』によると「散らかす」が複合動詞の後項となる用法は1563年にはすでに例がある。これが近年見られる「キレ散らかす」のような用法と客観的なミーム継承関係になかったとしても、両者を見比べると素朴には同一の表現と感じられるだろう。

言語知識を明らかにすることを目指す限り、語の連続性は使用者の認識上での連続性を考えるべきである。リンクの認定次第で、ミームには分裂も融合も復活も起こりうるのである。

7.3. 部分的な同一性

最後に省略を考察しよう。標準的な省略としては「キムタク」（＜木村拓哉）が挙げられる。これは素朴に省略と感じられ、専門的にもそうである。しかし省略の関わる事例は他にも多くある。素朴には可感でない省略に「小岩井」（＜小野・岩崎・井上）などが、省略と感じられるがフルの形式が使われない例（いわゆる *clipped compound*）には「朝ドラ」（＜?朝ドラマ）や「畿央大学」（＜?近畿中央大学）などが、民間語源による「省略」にはムショ（＜刑務所；元は「虫寄場」の略）や「むさい」（＜むさ苦しい；「むさい」の方が古い）などがある。派生前の形式の候補が複数ある例としてはイケメン（＜メンズ／面）や b-boy（＜beat/break/Bronx）などがある（さらにこの中でも複数の説が競合する場合と、積極的に複数の意味が込められる場合がある）。

これらを分析するに当たり、母語話者の言語知識を解明するのが目的であれば、素朴に省略と感じられるものを省略と扱うべきである。部分的な同一性リンクが発見されれば起源はどうあれ省略であり、そのリンクは複数あっても分析者の構築する語誌と食い違っても構わない。

そもそも語の省略を行う話者は何か物理的なモノを「分割」して省略形を「作って」いるのではない。これは省略前後の形式に必然的な対応があるという考え方の源泉になる。むしろ、ある語形を独立した別語の省略形として提案しているのである。ある長い語が *baseline* であり、別の短い語がその *elaboration* であるというのは必然的な関係ではなく、いくつもの選択肢がありうる。あえて前節で用いた「数珠つなぎ」の比喻で言うとするれば、省略をはじめとする派生を新たに行うというのは、貫く先の数珠が他にもある中から1つを選び、そこに同一性の糸を通すことにしようと提案するプロセスをいうのである。

8. おわりに

本稿の限界と課題を述べる。まず、語のプロトタイプ性やミーム説はあくまで言語学の立場からの分析であり、これで存在論的な問題が一挙に解決したわけではない。なお哲学の中でも (i) 理論的に有用な語のモデル構築を目指す、(ii) ‘word’ という語の使用を分析する、という異なる志向がある。Bromberger (2011: 490) の診断によると、カプランは前者で H&L は後者である。後者には言語学からの応答が有用だろう。

より根本的な課題として、いまだミーム概念の内実が一般的にも本稿の議論でも十分に明らかでないという点がある。本稿はミームをあくまで有用なメタファーと見なす非実在論を取り、

哲学と言語学の有望な接点として援用したにすぎない。したがって、語の典型をミームとしつつも、あくまで概念化者を主体とする捉え方で議論を展開し、「文化遺伝子が宿主たる人間に寄生し増殖していく」のようにミームを主体とする解釈は採用していない。この点で一般的なミーム論と乖離があることは確かであり、ミーム概念のより詳細な規定は課題である²⁵。

展望を示すと、語形成以外の言語学分野でも存在や同一性を切り口とした哲学的考察は有益と思われる。試みに例示すると、音素と異音、多義と同音異義²⁶、合成性、構文交替、等位接続テスト、間テキスト性、個別言語と方言、言語変化などの概念はその候補だろう。たとえば丹治（1996）は言語共同体という単位の分析にあたって、反射律・対称律は満たすが、推移律は満たさないかたちで、ゆるやかに規定されると論じている（cf. Hockett 1987: 98）。

何が誰にとって同じと見なされ、いつどのように変化するのか。こうした問いを立てることで、言語学と哲学が発展する見込みは十分にあると思われる。以下は哲学者と言語学者の間で交わされた対話であり、この種の学際的議論の可能性を示唆している。

(9) 野矢 あ、使役構文が多義的だって言うからには、構文は同じ構文？ 構文の同一性というのは確保されるわけですね？

西村 そうですね。

野矢 だけど、そのときに、たとえば、「太郎が窓を開けた」っていうのと、「花子は風で帽子を飛ばしてしまった」っていうのは、同じ構文なんですか。

西村 えーっと

野矢 どうして同じ構文というふうに。つまり、それが同じ構文なのに違う意味だから多義と同じような現象だというふうに言うわけでしょ？ （西村・野矢 2013: 217）

最後に「語形成」という用語に触れる。本稿でも厳密な語り方を徹底できていないことから分かるように、構成論に忠実な表現を一貫させることは困難かつ不便である。実践的には、メタファーはそれと自覚したうえで使い続けるしかない（Langacker 2016b）。それでも語形成（word formation）という伝統的な用語が実在論に強く影響されていることは認識されてしかるべきである。より適切には語導入（word introduction）などと呼べるだろう。

参考文献

- Aunger, Robert (ed.) (2001) *Darwinizing culture: The status of memetics as a science*. Oxford: Oxford University Press. 佐倉統・巖谷薫・鈴木崇史・坪井りん（訳）『ダーウィン文化論：科学としてのミーム』東京：産業図書. 2004 年.
- Bauer, Laurie (2014) Grammaticality, acceptability, possible words and large corpora. *Morphology* 24: 83–103.

²⁵ 萩澤・田中（2020）は、ミーム主体の捉え方をより強く打ち出して言語の慣習性を論じている。

²⁶ 多義論は言語学の中では例外的に同一性を明示的に問う議論が多くなされてきた。

- Bauer, Laurie (2019) *Rethinking morphology*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Benczes, Réka (2019) *Rhyme over reason: Phonological motivation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bromberger, Sylvain (2011) What are words? Comments on Kaplan (1990), on Harthorne and Lepore, and on the issue. *Journal of Philosophy* 108: 486–503.
- Bybee, Joan (2015) *Language change*. Cambridge: Cambridge University Press. 小川芳樹・柴崎礼二郎 (監訳) 『言語はどのように変化するのか』東京：開拓社. 2019年.
- Dąbrowska, Ewa (2020) Language as a phenomenon of the third kind. *Cognitive Linguistics* 31: 213–229.
- Dennett, Daniel (1991) *Consciousness explained*. Boston: Little, Brown. 山口康司 (訳) 『解明される意識』東京：青土社. 1998年.
- Dennett, Daniel (1996) *Kinds of minds: Toward an understanding of consciousness*. New York: Basic Books. 土屋俊 (訳) 『心はどこにあるのか』東京：筑摩書房. 2016年.
- Dennett, Daniel (2017) *From bacteria to Bach and back: The evolution of minds*. New York: W. W. Norton. 木島泰三 (訳) 『心の進化を解明する：バクテリアからバッハへ』東京：青土社. 2018年.
- Diamond, Jared (1997) *Guns, germs, and steel: The fates of human societies*. New York: W. W. Norton. 倉骨彰 (訳) 『銃・病原菌・鉄 (上・下)』東京：草思社. 2000年.
- Dressler, Wolfgang, Dieter Kastovsky, Oskar Pfeiffer, and Franz Rainer (eds.) (2005) *Morphology and its demarcations*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Drout, Michael (2013) *Tradition and influence in Anglo-Saxon literature: An evolutionary, cognitivist approach*. New York: Palgrave Macmillan.
- Evans, Rod L. (2007) *Every good boy deserves fudge: The book of mnemonic devices*. New York: Perigee.
- Frost, Rain, Jonathan Grainger, and Manuel Carreiras (2008) Advances in morphological processing: An introduction. *Language and Cognitive Process*, 23: 933–941.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- 萩澤大輝 (2018) 「素朴理論から見る認知形態論」『東京大学言語学論集』40: 21–38.
- 萩澤大輝・田中太一 (2020) 「ミームとしての言語—慣習性を問い直す」『日本認知言語学会第21回全国大会 Conference Handbook 2020』.
- Hawthorne, John and Ernest Lepore (2011) On words. *Journal of Philosophy* 108: 447–485.
- 平沢慎也 (2019) 『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ』東京：くろしお出版.
- 廣川洋一 (1997) 『ソクラテス以前の哲学者』東京：講談社.
- Hockett, Charles (1987) *Refurbishing our foundations: Elementary linguistics from an advanced point of view*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jackendoff, Ray (2012) *A user's guide to thought and meaning*. Oxford: Oxford University Press. 大堀壽夫・貝森有祐・山泉実 (訳) 『思考と意味の取扱いガイド』東京：岩波書店. 2019年.

- Jespersen, Otto (1905) *Growth and structure of the English language*. Leipzig: Teubner. 米倉綽 (監訳) 『英語の成長と構造』東京：英宝社. 2015 年.
- Kaplan, David (1990) Words. *Proceedings of the Aristotelian society, Supplementary volume*: 93–119.
- Kaplan, David (2011) Words on words. *Journal of Philosophy* 108: 504–529.
- Keller, Rudi (1994) *On language change: The invisible hand in language*. London: Taylor & Francis.
- 菊池翔士 (2015) 「異なるふたつの発話・筆記が同じ語のトークンであることについて」東京大学哲学研究室『論集』34: 206–218.
- 古東哲明 (2005) 『現代思想としてのギリシア哲学』東京：筑摩書房.
- 国広哲弥 (1985) 「認知と言語表現」『言語研究』88: 1–19.
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』東京：大修館.
- 倉田剛 (2019) 『日常世界を哲学する：存在論からのアプローチ』東京：光文社.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (2006) On the continuous debate about discreteness. *Cognitive Linguistics* 17: 107–151.
- Langacker, Ronald W. (2016a) Baseline and elaboration. *Cognitive Linguistics* 27: 405–439.
- Langacker, Ronald W. (2016b) Metaphor in linguistic thought and theory. *Cognitive Semantics* 2: 3–29.
- Langacker, Ronald W. (2019) Morphology in cognitive grammar. In: Audring, Jenny and Francesca Masini (eds.) *The Oxford handbook of morphological theory*, 346–364. Oxford: Oxford University Press.
- McCulloch, Gretchen (2019) *Because internet: Understanding the new rules of language*. New York: Riverhead Books.
- Merriam-Webster (2019) *Merriam-Webster's elementary dictionary*. Springfield, MA: Merriam-Webster.
- 宮岡伯人 (2002) 『語とは何か—エキスマー語から日本語をみる』東京：三省堂.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室』東京：中央公論新社.
- 西山佑司 (2013) 「変化文、潜伏疑問文、潜伏命題文」西山佑司 (編) 『名詞句の世界：その意味と解釈の神秘に迫る』369–406. 東京：ひつじ書房.
- 野矢茂樹 (2012) 『心と他者』東京：中央公論新社.
- Origgi, Gloria and Dan Sperber (2000) Evolution, communication and the proper function of language. In: Carruthers, Peter and Andrew Chamberlain (eds.) *Evolution and the human mind: Language, modularity and social cognition*, 140–169. Cambridge: Cambridge University Press.
- 三條雅人 (2015) 『ネットで見かけた信じられない日本語：うろ覚え・勘違い・言い間違い・誤植』東京：社会評論社.
- Scott-Phillips, Thom (2014) *Speaking our minds: Why human communication is different, and how language evolved to make it special*. London: Palgrave Macmillan.
- Shermer, Michael (2011) *The believing brain: From ghost and gods to politics and conspiracies – how we construct beliefs and reinforce them as truths*. New York: Henry Holt.
- 塩田英子 (2018) 「空耳と語呂合わせの暗記法：語用論的音韻拡張の観点から」『日本語用論学会

第20回大会発表論文集』13: 65–72.

丹治信春 (1996) 『言語と認識のダイナミズム：ウィトゲンシュタインからクワインへ』 東京：勁草書房.

Taylor, John R. (2002) *Cognitive grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Teichmann, Roger (2016) The identity of a word. *American Catholic Philosophical Quarterly*.

Wittgenstein, Ludwig (1953/2009) *Philosophical investigations*. Revised 4th edition by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte. Malden, MA: Wiley-Blackwell.

Worden, Robert (2000) Words, memes and language evolution. In: Knight, Chris, Michael Studdert-Kennedy, James Hurford (eds.) *The evolutionary emergence of language; Social function and the origin of linguistic form*, 357–371. Cambridge: Cambridge University Press.

四津雅英 (2007) 「固有名が多義性説と語の存在論」『科学哲学』40: 67–79.

Zwicky, Arnold (2005) Just between Dr. language and I. *Language Log*. <http://itre.cis.upenn.edu/~myl/language-log/archives/002386.html> [accessed April 2020]

Rethinking the Fundamentals of Word-Formation

HAGISAWA Daiki

hagiawa_daiki@yahoo.co.jp

Keywords: word formation, morphology, ontology of word, identity, meme, folk theory

Abstract

This paper starts by showing that the confusion surrounding the philosophical discussion in recent years of the ontology of words can be sorted out by the prototype theory of categorization adopted in cognitive linguistics. It goes on to argue that the insights into words gained so far in philosophy and linguistics can be straightforwardly integrated into a theory that views a prototypical word as a meme. This leads to the question of how we identify memes as such. Living as we do in a world where everything is in flux, we have to create order in that world to make our experience coherent. Words as linguistic memes emerge as we participate in a game in which we form, drawing on naïve theories, links of similarity and association. Viewing words as memes allows us to think of morphological derivation as a process by which a link of partial identity is established between multiple word types, rather than as one producing an objective change.

(はぎさわ・だいき 神戸市外国語大学大学院)